

ピグミーとヨーロッパ人の出会い

—1860～1870年代を中心に—

北 西 功 一

European Encounter with “Pygmies”:
Focussing on the Period from the 1860s to the 1870s.

KITANISHI Koichi

(Received September 30, 2011)

はじめに

現在、ピグミーと呼ばれる人たちが中部アフリカの熱帯雨林に住んでいる。このピグミーという名称は自称ではなく、ヨーロッパ人が名付けたものである。ピグミーという単語が古代ギリシアから18世紀までヨーロッパでどのように用いられていたのかについては、拙稿で詳しく紹介した（北西、2010c）。古代ギリシアではツルと戦うコビトとされ、中世にはさまざまな怪物と同列の存在であると考えられていた。啓蒙主義の時代には、コビトや怪物としてのピグミーは神話、伝説、架空の物語の中だけに存在するものであり、その起源は昔の人たちが類人猿やサルを見誤ったものであると考えられた。この説を主張する人としてはフランスの博物学者ビュフォンが有名で、「鳥の博物誌」のツルの項目にその主張が載っている（Buffon, 1770-85: 290-292）。当時の知識人たちにとって、ピグミーを空想の産物であるとするのが科学的な態度であった。

さて、事態が大きく展開するのは1860～70年代である。つまり、アフリカにピグミーが実在すると多くの欧米人が認めるようになってから、150年程度しか経っていない。1892年に発表されたアフリカのピグミーについての包括的な論文の書き出しは次のようになっている。

30年前は誰もアフリカの**コビトの部族¹⁾**の存在を信じていなかった。ただし、私が後で示すように、彼らについての信頼できるさまざまな報告がそれ以前からあったのだが。・・・（Schlichter, 1892: 289）。

本稿では、19世紀後半にヨーロッパ人がアフリカで現在ピグミーと呼ばれている人たちの発見し、その人たちをピグミーと名付けていった過程、およびその際に彼らを人類の中のどこに位置づけたのかということを見ていく。19世紀前半までに集められた報告ではヨーロッパ人による直接観察はまだなく、伝聞の話ばかりであり、それらは事実と空想が入り混じった（時には空想のみのこともある）ものだった。19世紀後半に大西洋岸では Du Chaillu の発見を皮切りにフランス人やドイツ人の探検隊が調査を進めていく。一方、ナイル川をさかのぼり、体の小さな人たちと出会った Schweinfurth は彼らを古代ギリシアのホメロスやアリストテレスの話と結び付け、彼らをピグミーとした。他の探検家も彼に続き、ついにはピグミーがヨーロッ

パに連れてこられるなどして、ピグミーの实在がしだいに確定していく。この過程において、ピグミーが探検家やヨーロッパの研究者にどのような名称で呼ばれ、どのように認識されたかを、彼らの探検記、論文、著作などを丹念に読み進めることで追っていく。

中世の神学者や近世の博物学者は、ピグミーを人間ではないが他の動物に比べて最も人間に近い存在であると考えていた。19世紀後半にアフリカの森で発見された体の小さな人たちは、類人猿ではなく明らかにヒトの姿をしていたのであるが、彼らとはときには以前のピグミー観と共通するような見方をされた。また、現在、ピグミーは先住民として、もしくはまわりの人たちから圧迫される人たちとして認識されることがあるが、そのような認識は当初から存在した。現在広まっているピグミーのイメージのいくつかは、19世紀後半にすでに存在したことも明らかにしていく。

本稿は伝説ではなく現実のピグミー研究の始まりをとりあげている。そういう意味で、これはピグミー研究の基本的なレビューワークであるとも言える。ただし、これまで日本ではこのようなテーマの研究は存在しなかった²⁾。これにはいくつか原因があるだろう。その一つに、これまで文献の入手が困難だったことがあげられる。以前なら19世紀のヨーロッパの文献を収集する場合は実際にヨーロッパに行き行って収集するか、日本各地の図書館をまわって探すことが必要だった。しかし、インターネットの発達に伴い、全国の図書館に所蔵されている文献を検索して取り寄せることが可能になり、また電子化がなされ、いくつかのサイト（Google booksがその典型）では著作権が切れた文献の全文がそのまま載っていることもある。本稿で用いている文献のほとんどが何らかの形でインターネットを使って手に入れたものである。また英語ではなくフランス語とドイツ語の文献が主であることも、文献を心理的に遠ざける結果となったのかもしれない。もう一つには、この時代のピグミー研究に対する関心の低さがあるだろう。19世紀の探検家の記述は不正確で信用できず、研究者の議論も現在から見ると明らかに間違っていることが多々ある。より新しく詳細で正確なデータをもとに議論をすべきだと考える人も多いだろう。ただし、19世紀の資料がたとえ不正確であったとしても、当時のヨーロッパ人がピグミーをどのような存在であると考えていたのかを知ることは意味がある。19世紀後半のヨーロッパ人のピグミー観は、遠い過去から現在に至るピグミー観の重要な転換点であり、欧米人（さらに近年は日本人も）がピグミーとどのように関わってきたか、関わっているか、関わっていくべきかを考えるにあたって、参考となるに違いない。

1. 1860年代以前のピグミーもしくはコビトに関する報告

まず、17世紀におけるピグミーと思われる人たちの報告を二つ取り上げよう。16世紀末に Andrew Battell というイギリス人がポルトガル人によって囚人としてアンゴラに送られ、赤道近くの大西洋岸で18年間過ごした。彼の帰国後、彼が旅行で見聞きしたことが Purchas によって1625年にロンドンで出版された (Schlichter, 1892: 292)。その中でピグミーに関係すると思われる記述をとりだしてみよう。場所は現在のガボンである。

・・・西の方の、Mayombe から8日間の旅で着くところに Mani Kesock という王がいる。・・・

Mani Kesock のところから北東の方向に Matimba と呼ばれる人たちがおり、彼らは12歳の少年よりも大きくないがずんぐりした体型をしている。また彼らは肉だけで生きていて、その肉を森の中で弓矢で狩猟する。彼らは貢物を Mani Kesock に支払い、すべての象牙とゾウの尾を彼に渡す。彼らは決して Marombo の家に入らず、彼らが住んでいるところに他の人たちがやってくる

のを認めない。もし、偶然 Maramba もしくは Loango の人たちが彼らの住んでいるところを通り過ぎたら、彼らはその場所を去り、他のところへ移動する。

女性も男性と同様に弓矢を持ち歩き、彼らは一人で森を歩いているときでも毒矢でゴリラを倒す (Ravenstein, 1901: 58-59)。

もう一つは Dapper の報告で、その本は1670年にアムステルダムで出版されている³⁾。その中のコビトに関する記述を抜き出してみる。

背中が曲がった状態のコビトを同じ地域で見ることができる。彼らの頭は異常に大きく、緑なし帽の形に紐で締めつけられたような皮膚をしている。黒人が言うには、森の豊かな地域があり、そこでしかコビトを見ることができず、彼らが最もたくさんゾウを殺している。この小さな人たちは Bakke-Bakke や Mimos と呼ばれている (Dapper, 1686: 332)。

・最もヨーロッパ人に象牙を売っているのは Lovango⁴⁾ の人たちで、彼らはそれを Bokke-Meale の Jago から買っており、Lovango の人たちは塩の入ったかごを彼らの奴隷の頭に載せてそこまで運ぶ。Jago は、Macoco 王に従属している Mimos や Bakke-Bakke と呼ばれている小さな人たちから象牙を手に入れている。Jago は、このコビトが狩猟の時に自身の姿を見えなくすることができるかと断言している。また、動物の跡を苦もなく見抜くことができ、彼らはその動物の肉を食べ、象牙は売っているという (*Ibid.*: 358)。

Battell と Dapper が記述した体の小さな人たちが住んでいるとされる場所は、ガボンの現在バボンゴ・ピグミーが住んでいる場所を含んでおり、狩猟に依存し、ゾウのハンターであることなどピグミーの特徴を備えている。彼らが狩猟で得た象牙がヨーロッパまで流れていることから、当時からピグミーが象牙取引に巻き込まれていたことがわかる。Dapper が述べている Bakke-Bakke、Mimos の身体的特徴は、背中が曲がっているなど病的に体の小さな人の一部にみられるものであるが、これはピグミーの話と病的に体の小さな人たちの話が混ざってしまったためだろう。2人の報告には誇張や間違いも含まれているものの、部分的には事実が含まれていると思われる。

この両者とも、彼らにピグミーという名称を与えていない。北西 (2010c) でも述べたが、当時のヨーロッパ人が想像していた怪物としてのピグミーと、明らかにヒトである体の小さなハンターとがかけ離れていたことがその理由だろう。

コビトが住んでいるという話が以前から多数伝えられているのがマダガスカルである (Petermann, 1871: 142-148; Garnier, 1884: 20-23)。ピグミーを類人猿やサルの見間違いとしたビュフォンは別の著作でこのマダガスカルのコビトの話に一節を割いている (Buffon, 1774-1789: 505-511)。その一部を紹介する。マダガスカルの中央部の標高の高いところに肌の白いコビトがいるという話がある。また、ある医師が、Commerson という人が残した文書の中に、マダガスカルの内陸部の高地に6フィートの巨人とともに極端に小さい半人 (demi-hommes) のピグミーの種族がおり、彼らは集団を形成していて Quimos もしくは Kimos とマダガスカルの言語で呼ばれている、という一節を見つけている。ビュフォンは、腕が長くて折り曲げることなく膝の下まで達しているということから四足動物ではないとし、知性に関しては、能力は低いものの、他のマダガスカル人との争いではかなり知的で機転がきくと述べている。ただし、Garnier (1884: 20-21) に述べられているように、これは大型の原猿類インドリである可

能性がある。つまり、ビュフォンが「博物誌・補遺4巻・マダガスカルのコビト」で述べていることに反して、「鳥の博物誌」で述べたことがここでは正しいのだろう。

Koelle 神父はシエラレオネでコビトの話をもつと聞いている。一つは Bayon という人たちの説明の中である。Bayon の首都である Pati から東に4週間の旅程のところに Lufum の近くに大きな Liba 湖があり、その湖岸の一部に Kenkob という人たちが住んでいる。彼らの身長は3もしくは4フィートしかないが、とても頑丈な体をしていて、弓矢の名手である。彼らは平和的で、獵の成果によって暮らしていて、とても寛大な人たちである。例えば、もしある人がゾウを倒したら、彼はそのすべてを分けてしまう。もう一つは Bagba という人たちの説明の中である。Bagba の首都 Ntar から一日の旅程で Banon に着く。そこから3日の旅程で Debe 川に着く。Debe 川は Riba 川とも呼ばれ、Rifom 地方にある。Riba 川には身長が3～5フィートしかない小さな人たちがいて、彼らは Betsan と呼ばれ、優れたハンターである。彼らはとても平和的な人たちで、決して戦争しない。もっぱら狩獵の獲物を食べて生活していて、時には Rufum で彼らの肉と雑穀を交換する。彼らは土地を耕さない。絶えず移動していて、6カ月もしくは12カ月ごとに住居を替える。彼らの家は簡単に作れ、大きな木の樹皮でできている。彼らはサル、ヒヒ、イノシシ、アンテロープ、ゾウを狩獵する (Koelle, 1854: 11-12)。後で紹介する Schweinfurth は、二つは川の名前 (Liba と Riba) と地域の名前 (Lufum と Rufum) が似ていてアフリカでは L と R は区別されずに使われることが多く、またアフリカ人は川と湖の概念を混同することが多いため、Kengkob と Betsan を同じ人たちではないかと考えた (Schweinfurth, 1874b: 137-138)。ハンターであり農耕をしないこと、獲物を分配すること、遊動生活をしていることなどは現実のピグミーと一致し、架空の話が偶然そうだったとは考えにくい。ただし、これらはシエラレオネに流れ着いた奴隷から聞いた話で、どこの話か場所が確定できない。

19世紀前半において、コビトがいるという話を伝え聞いたという報告が最も多くなされている地域は現在のエチオピア南部である⁵⁾。例えば、Boteler (1835: 212) によると、1826年に得られたそのあたりを旅した人の話では、Meric Mungoan という人たちと Wanekah という人たちの住んでいる地域の間でモンバサから6週間の旅程のところに、身長が3フィートに達することがほとんどないピグミー人種の人たちが住んでいて、彼らの自称は Mberikimo で、多くの正確な報告によって彼らの存在を断言できるという。また、Léon des Avanchers (1859: 153; 163) も Wa-Berikimo という小さな人たちがいるという情報をザンジバルで手に入れたと報告している。Harris (1844: 63-65) と Krapf (1860: 43-46) にはかなり詳しくほぼ同じ記述がある⁶⁾。ここでは Krapf のほうを紹介する。彼はエチオピアからやってきた奴隷からの情報をもとに報告している。

Kaffa と Susa の南には竹がたくさん生えている蒸し暑い地域があり、そこには Doko と呼ばれる種族が住んでいて、彼らは10歳の少年より大きくない。身長はたった4フィートである。彼らは濃いオリーブ色の肌をしていて、獣のような完全に野蛮な状態で暮らしている。家、聖堂、Gallas のような聖なる木を持っていないが、Yer というより高次の存在の概念のようなものがあり、不幸な時や心配な時に、彼らは頭を地面につけて足を木もしくは石に立てかけて逆立ちをして、Yer に祈る。「もしあなたが本当に存在するのなら、どうして私たちが殺されるのをお認めになるのでしょうか？ 私たちはあなたに食べ物も服も求めていません。なぜなら私たちはヘビとアリとネズミを食べて生きているからです。あなたが私たちを創造したのに、どうしてあなたは

私たちが足で踏みつけられるのをお認めになるのでしょうか？」Doko はリーダー、法律、武器を持っていない。彼らは狩猟をせず、土地を耕さず、果物と根茎、ネズミ、ヘビ、アリ、ハチミツだけで生活し、サルのように木に登り、男女とも完全に裸である。彼らの唇は厚くて突き出ている、鼻は平らで、目は小さい。髪は巻き毛ではなく、女性の髪は肩にかかっている。彼らの手足の爪はハゲワシのかぎ爪のように伸びていて、その爪を使って掘ってアリの捕まえ、ヘビを切り裂く。ヘビは生で貪り食う。彼らは火を知らない。ヘビの背骨だけを首のまわりに巻き、耳はとがらせた木で穴をあけている (Krapf, 1860: 43-44)。

その他に Krapf は、Doko には結婚の制度がなく家族も存在しない、また奴隷狩りの餌食になっている、と述べている。彼は北緯 1 度 30 分の Barava というところで上記の描写に一致する奴隷を見たという。その奴隷は身長が 4 フィート、ずんぐりした体型で肌の色は濃く、その地の人は彼が内陸部のピグミーであると Krapf に請け合ったという (*Ibid.*: 44-45)。

さて、ピグミーという用語についてであるが、Boteler (1835: 212) は Mberikimo がピグミー人種であるとし、また Léon des Avanchers (1859: 163) は Wa-Berikimo の住んでいる地域に流れている川をアラブ人の地理学者がピグミー (Pygmées) 川と呼んでいた川であるという。Harris (1844) ではピグミーという単語は使われていない。Krapf (1860: 43) に Doko はピグミー人種であるという記述があるが、Doko が古代ギリシアの歴史学者ヘロドトスが中部アフリカの大きな川のそばで発見したピグミー⁷⁾であるかどうかはわからないとしている (Krapf 1860: 45)。この地域ではピグミーという単語が以前から使われていたが、それはポンポニウスのメラ⁸⁾、さらにアラブ人を通してこの地に関するコビトの伝説が伝わっていたことが理由だろう。伝説と 19 世紀前半の伝聞がごちゃまぜになっていたようである。

Schweinfurth によってピグミーが発見され、ヨーロッパでピグミーの存在が認められるようになる 1870 年代以前、このエチオピア南部の話が研究者にどのように考えられていたかは、19 世紀後半のドイツを代表する人類学者である Hartmann の記述を読めばよくわかる。Hartmann もこの地域で Krapf とよく似た話を収集していた。

Doko について私が得た情報は、私には当初 Krapf や他の人がすでに得ていた情報のようにとても漠然とした神話のようなもののように思え、私には長い間機会があっても自分が得た情報を述べる勇気がほとんどなかった。Akka についての Schweinfurth の研究ののち、彼らが現実の人間であるということが分かってから、私はその情報を公開してもよいと考えた (Hartmann, 1876: 496)。

つまり、研究者の多くはこれらのエチオピアのピグミーの話は伝説や架空の話であって事実ではなく、まともな科学者であるならそのようなものは取り上げるべきではないと考えていたのである。実際、エチオピアのピグミーは空想の産物であったのだが、1860-70 年代に他の場所でピグミーの存在が確認されたことによって、1870~90 年代には Hartmann を含めてかなりの研究者がエチオピアにも存在すると信じるようになっていた⁹⁾。

2. 大西洋岸のピグミーの発見

(1) Du Chaillu

ヨーロッパ人で初めてピグミーに直接出会ったことが確実なのはフランス系アメリカ人の

Du Chaillu である。彼は1855～59年と1863～65年の2回にわたってアフリカのガボンを探検し、1回目の探検ではたくさんのゴリラを観察している。ピグミーと出会ったのは2回目の探検である (Du Chaillu, 1861; 1867)。

Du Chaillu (1867) に基づいて彼とピグミーの出会いについて紹介しよう。1865年6月に彼は Ashango という人たちが住んでいる地域の Niembouai という村の近くで、Obongo と呼ばれているコビトに出会っている。彼らの小屋は低い楕円形で、柔軟な枝を組み合わせて作られ、下は地面に固定され、上でアーチ状になっていて、その枠組を大きな葉が覆っている。高さも幅も4フィート程度である。Obongo はとても怖がり、Ashango のガイドとともに出かけた Du Chaillu が10軒くらいの小屋のある彼らの村に近づくと、住民の多くが逃げ出した。取り残された老女たちにビーズをあげるなどして手なづけて、女性6人と若い男性1人の身長などを計測した。女性の身長は133cm から153cm (平均142.7cm)、男性は137cm であった。その他の彼らの身体的特徴としては、肌の色がくすんだ黄色で、Ashango よりは薄い色をしていること、額はせまく頬骨が突出していること、髪がとても短い巻き毛であること、胴体と腕の比率は普通だが、脚は胴体と比べると短いことなどをあげている。Obongo の男性は動物の毘鹿と小川での漁撈を巧みに行って、それで得たものを Ashango と交換し、プランテン・バナナや鉄の道具などを手に入れている。彼らは一つの場所に留まらず、獲物が少なくなると次の場所へ移動するが、遠くに行くことはなく、Ashango のテリトリーに住んでいる Obongo はそのテリトリーの外には行かない。一方で Ashango は Obongo との親族関係を認めず、結婚もしない (Du Chaillu, 1867: 269; 315-324)。

狩猟、遊動生活、小屋の作りなどの生活様式と、身長や肌の色などの身体的性質はピグミーによくみられる特徴を示している。Obongo という名称、彼らが住んでいる地域、身体的特徴や生活様式からすると、彼らが現在バボンゴと呼ばれているピグミーの1グループであることは間違いない。

ただし、Du Chaillu は探検中及び Du Chaillu (1867) を書いているときは、彼らをピグミーであると考えていなかったようである。Du Chaillu (1867) にはピグミーという単語は一度も使われておらず、一回目の探検の記録である Du Chaillu (1861) には一カ所ピグミー (Pigmy) が出てくるが、それは1699年にチンパンジーを解剖した Tyson がそれをピグミーと名付けた (北西、2010c: 50-51参照) という記述 (Du Chaillu, 1861: 388) である。Du Chaillu はビュフォンに倣い、ピグミーという名称は類人猿にふさわしいものである見なしていたのだった。

彼のコビトについての報告はフランスの研究者に注目され、同じ年の *Annales des Voyages, de la Géographie, de l'Histoire et de l'Archéologie* に Obongo の部分だけを抜粋しフランス語訳されて掲載された。Malte-Brun が書いたその前書きの中に「Obongo というアフリカ内陸部のコビトはホメロスのピグミーを思い出させる」という記述がある (Malte-Brun, 1867: 257)。これにより Du Chaillu は自分が発見したコビトが古代から伝わるピグミーであるということに気がついたようである。

しかし、Du Chaillu 自身は、この後行われたアメリカ地理学会での講演 (その内容は Du Chaillu, 1870に記載) と *The Country of the Dwarfs* (Du Chaillu, 1872) というコビトを前面に押し出した本において、探検時にすでに古代ギリシアのピグミーとの関連はわかっていたと述べている。特に Du Chaillu (1872) では、彼自身がヘロドトスの「歴史」に出てくるナサモン人が出会ったコビトの話 (北西、2010c: 41参照) を Ashango に聞かせるというどう考えても作り話としか思えない話 (Du Chaillu 1872: 242-244) を付け加えている。また、その二つの

著作で、Obongo とホメロスのピグミーを関連付けようとして、Du Chaillu (1861) で書いたある鳥の話を持ち出している。それは、現地人はその鳥をつかまえるのが難しく、捕まえたとしてもくちばしで目を突き刺そうとするといった説明で、これをピグミーとツルとの戦い（北西、2010c: 40参照）と結び付けようとした（Du Chaillu, 1870: 101-102; 1872: 261-264）。

他にも作り話としか考えられない話が加えられたり、一つの出来事を少し表現を変えて別のところで繰り返し述べているといった記述が特に Du Chaillu (1872) にはたくさん存在している。本人、もしくは出版社が一般読者の興味を引くように話を誇張もしくは創作したと考えられる。

このため、Du Chaillu の話は少なくとも研究者にはあまり信用されなくなり、彼がピグミーの発見者として学界で認められることはなかった。Petermann が1871年に書いたピグミーに関する包括的な論文では、Du Chaillu がホメロスのピグミーと結び付けようとするあまりツルの群れの話を持ち出していることを批判し（Petermann, 1871: 140）、また Du Chaillu が Obongo について語ったことが信頼できるかどうか一般的には疑わしく思われていると述べている。ただし、彼自身は、挿絵は俗受けするように誇張されてはいるものの本文は事実を記述していると考えていた。さらに著しく事実をゆがめている Du Chaillu (1872) 以降は信頼を失い、例えば Dybowski (1894: 306) は、Du Chaillu は風変わりな話を付け加えることを好み、直接観察した事実の部分を選別するのが難しいと述べている。

彼らの体が小さい理由として、Du Chaillu (1867: 320) は、Obongo のコミュニティが小さく、孤立して暮らしており、家族を維持するために兄弟姉妹間で子供を作り、それによって身体的な退化が生じているとしている。さらに Du Chaillu (1870: 112) ではそのように孤立するようになった理由として、「戦争、征服、奴隷制がコビトの土地を席卷し、彼らは中部アフリカの森に避難場所を求めた。現在、他の多くの種族のようにだんだん少なくなっていて、小さなコミュニティに分散して住んでいる。」という。つまり、まわりの人たちに比べて軍事的に弱い人たちが孤立して退化したという解釈である。また Du Chaillu (1872: 255) には、Obongo の小さな子どもたちを見て、チンパンジーを思い出した、という記述がある。

(2) その他のフランス人探検家

Touchard が1860年に現在のガボンの Ogooue 川をさかのぼり、その流域の民族を記録している。その中に、Akoa という人たちが M'Pongoé によってすでに絶滅されたということと、Boulou という人たちが Pahouins (Fang) によって圧迫され絶滅の危機にあるということが書いてある（Touchard, 1861: 9-12）。ただし、これには身体的特徴、例えば体の小さな人たちという記述はない。

1868年に Fleuriot de Langle は、現在のガボンの Lopez 岬で解放された奴隷の中にとっても良い状態のコビトを見つけ、写真に撮った。彼は間違いなく Akouas の 1 グループに属しているという。ただし、彼は通訳の言語を理解できず、情報を引き出すことはできなかった。Akouas というのは、ガボンの北の方に住んでいて Sakianis もしくは Bulous などからなる 1 グループであるという（Fleuriot de Langle, 1876: 279-280; 写真は283）。ただし、彼はピグミーという単語は使っていない。

1872年から1878年にかけて 3 回のアフリカ探検をおこなった Marche は、1877年 7 月に現在のガボンの Ogooue 川流域の Okanda が住む地域で、Okoa もしくは Bongo と呼ばれる体の小さな人たちの村を訪問した。ただし、記述はあまりない。男性の身長は150-152cm、女性は

140-143cmで、決して奇形ではなく均整のとれた体をしている。Okoaは偉大なハンターで、非常に勇敢であり、ニシキヘビを狩猟するという (Marche, 1879: 342-343)。MarcheもOkoaに対してピグミーという単語は使っていない。

Fleuriot de Langleの話と先のTouchardの話がいっしょになり、さらにMarche (1879: 106)の「Boulouは多分この地域にもともといた種族で、現在森の中に分散し、ガボン人は彼らを劣った存在とみなしている」という記述も合わさって、Hamy (1879)は彼らを絶滅の危機に瀕しているコピトたちと解釈し、それがQuatrefages (1881-82)とFlower (1888)に引き継がれることになる。ただし、Boulouは、Schlichter (1892: 291)でも指摘されているように、Touchard (1861: 10-12)を読む限り農耕民の生活様式を持っており、ピグミーとは考えられない。

(3) ドイツの探検隊

1873年にドイツからLoangoの海岸部に調査隊が派遣された。その一員であるFalkensteinはChinchoxoというところでBabongoの写真をとっている (Falkenstein, 1874: Taf. II; Hartmann 1876: Taf. XIII)。

また同じく一員のBastianは海岸部で3人のBabongoとされる人に会っている。そのうちの一人はLoangoの人を父とし母がBabongoである混血で、他の現地人からMacaca (サル)と呼ばれ、からかわれていた。身長は44インチ (112cm)で、まだ完全に成長し切っていないようである。もう一人のBabongoと呼ばれる人は海岸部の病的に体の小さな人であり、本来は内陸部の森に暮らしている体の小さな人たちを指す言葉だったのが、そのような人たちに転用されるようになったという。もう一人は本当のBabongoの子供で30インチ (76cm)しか身長がなく、黒褐色の肌をしていて、額は丸く、しゃくれた鼻を持ち、目と耳は大きい。内陸部のBabongoについて伝え聞いた話では、彼らは固定した居住地を持たず、他の民族の森の中に住み、その土地の支配者に野生の毛皮で税を納めていて、その獲物は毒矢か罾で仕留める。現地の人に聞いたBabongoの土地に至る旅程がたくさん示されているが (Bastian, 1874: 137-145; 342)、それはどれも森の中の最も奥にいるというイメージを抱かせるものである。

またBastianは彼らに対してピグミーという単語を用いている。後で述べるSchweinfurthによるAkkaの発見に伴い、同じようなコピトを見つけることができないかと彼は考えていたため (*Ibid.*: 136)、Schweinfurthと同様に用いたのだろう。

このドイツの調査隊の中で最もしっかりとした報告をしているのがLenz (1878)である。彼は1874年から1877年の3年間、前の二人よりもかなり長くアフリカに滞在している。彼はOgowe川の流域でAbongoもしくはAkkoaと呼ばれるコピトの人たちを実際に彼らが住んでいる地域で観察している。彼の観察によると、Abongoの村は40~60人くらいで、彼らの家は4フィートの高さで何本もの曲げられた木の棒を組み合わせて枠組みとし、それが木の葉で覆われたものである。彼らは弓矢を使って狩猟するが、その矢にはツル植物から採った毒をつける。また網を森の中で半円の形に囲んで動物を追い込み、最後は投げ槍でしとめる。Abongoは小さな魚がたくさんいる小川の近くに滞在し、漁撈をしている。その方法は独特の編んだかごを設置したり、ヤシの実を搗いてつぶしたものを魚毒として川にまき散らし、マヒした魚を捕まえるというものである。村には大量の乾燥した肉と魚があり、それらを近隣の黒人と交換する。彼らはほとんど家財道具を持たず、近隣の黒人と交換で手に入れた鍋があっただけだった。彼らの衣服はとても簡素で樹皮から作られた腰布がある程度で、子供は完全に裸である。

Abongo は熟達したハンターとして他の人たちから認められ、Abongo が村近くにやってきても嫌がられることはない。Abongo は純粋な狩猟民族であり、農耕を軽蔑していて、またその不安定な生活様式のために農作物を育てることができない。家畜を飼うこともせず、彼らは狩猟と漁撈の産物のみで生活している。宗教に関して、彼ら自身のものはなく、近隣の黒人が用いているお守りを身につけたりする。音楽については、彼らは楽器を持たず、即興で歌を歌い、その場の状況に合わせた歌詞を復唱する。Abongo の女性と他の黒人との間に正式の結婚は見られず、それは黒人が Abongo よりも価値の高い存在であると自身を考えているからである。ただし、体の大きな Abongo が稀にいて、それは混血ではないかと推測される。また、Abongo が奴隷狩りにあった場面に遭遇した (Lenz, 1878: 76, 83, 107-115)。

Lenz は、Abongo の体が小さいことを身体的な退化であるとし、また簡素な物質文化や自身の宗教を持たない、即興の音楽しかないことなどを精神的な退化であるとしている。この退化の理由は、奴隷狩りのため Abongo が近隣の黒人に対して不信感、恐怖感を持ち、長い間同じ居住地に住み続けようとせず、不安定で安らぎのない生活を送ることになり、季節によっては悲惨な栄養状態となってしまうことと、森の中で小さな集団で分散して暮らし、孤立しているために近親婚が起きて身体的な退化が起きることであるという。また彼らは黒人のもとで暮らしているジブシーであるとも言われている (*Ibid.*: 1878: 115-116)。

その一方で、Lenz は、Abongo は後述の Akka、エチオピアの Doko などとともに赤道アフリカの最初の住民で、移動してきた他の人たちによって押しのけられて、追い散らされたのではないかと述べている (*Ibid.*: 117)。

Lenz はアリストテレスやホメロスのコビトの紹介の中でピグミーという単語を使っているが (*Ibid.*: 103)、Abongo がピグミーであるとは述べていない。

このように紆余曲折はあったものの Du Chaillu から始まり、フランス人、ドイツ人の探検家によってピグミー (現在バゴンゴ・ピグミーとされる人たち) が発見され、西赤道アフリカにおける存在が確定していく。ただし、この西のピグミーは発見こそ早かったものの、ヨーロッパの学会においてピグミーの存在が確実なものとして初めて認められたのは、Schweinfurth によって発見された Akka であった。

3. 東の内陸部のピグミー

(1) Schweinfurth による Akka の発見

1850年代後半から、ナイル川の源流がどこかということに関心が集まり、多くの探検家が様々なルートを探検した。1857年に Burton と Speke はアフリカ東海岸からタンガニーカ湖に到達し、さらに Speke は1858年にビクトリア湖を発見し、彼はビクトリア湖をナイル川の源流と推定した (Speke, 1863; 1864)¹⁰⁾。1863年、Baker 夫妻はナイル川をエジプトからさかのぼり、ビクトリア湖から注ぎ出る川を探検していた Speke と Grant に Gondokoro というところで出会った (Speke 1863)。さらに Baker 夫妻は新しい湖を見つけるために探検を続け、アルバート湖を発見した。これらの探検からビクトリア湖やアルバート湖がナイル川の源流である可能性は高まったが、まだ湖から川をたどってナイル川に行きついたわけではなかった。

Schweinfurth は1869年にハルツームを出発し、白ナイルをさかのぼり、ナイル川の分水嶺を越え、Welle 川 (Uele・コンゴ川の支流) を発見した。彼は Monbuttoo という人たち (現在では Mangbetu と表記される) の Munza 王の宮殿に滞在した。それ以前から彼はコビトについての話を聞いていたが、その宮殿にコビトがいるということを知って、王宮の人たちにコ

ビトに合わせるよう要求した (Schweinfurth 1874a, 1874b)。以下は、彼が初めてコビトと出会ったシーンである。

何日か後、私はキャンプでの叫び声に注意をひかれた。私は Mohammed¹¹⁾ が王の従者であるピグミーの一人を驚かして、彼の激しい抵抗にもかかわらず、私のテントにまっすぐ彼を運んできていることを知った。私が見上げると、確かにそこには見たことのない小さな人が Mohammed の右の肩に座らされていた。彼は神経質に頭を抱え、警戒してあらゆる方向に視線を向けていた。Mohammed はすぐに正面の椅子に彼を座らせた。王の通訳は彼の側に位置していた。そのようにして、私はついに数千年間の神話が現在に具現化した存在を本当にこの目で見たのだった (Schweinfurth, 1874b: 127)。

Schweinfurth は彼の肖像画を描き、身体を計測し、いくつかの質問をした。彼の名前は Adimokoo、彼は小さな村の村長で、その村は王宮からおよそ24km のところにある。彼の民族名は Akka で、北緯 1～2 度の間の Monbuttoo の南の広大な地域に住んでいる。彼らの一部は Monbuttoo の王の支配下にあり、王は宮殿の豪華さを増すために珍しい存在として数家族のピグミーを近くに住まわせている。Schweinfurth は彼にプレゼントを与えてなつかせ、他の Akka の男性も訪れるようになった (Schweinfurth, 1874b: 127-131)。

Schweinfurth は Munza 王からイヌとの交換で15歳くらいの Akka の若者を一人もらった (*Ibid.*: 67)。彼の名前は Nsewue で、Schweinfurth は Akka が本当に存在する証拠として彼をヨーロッパに連れて帰ろうとした。しかし、彼はヨーロッパに向かう途中、ハルツームで赤痢のために死亡した (*Ibid.*, 486)。また、彼のノートやスケッチは旅の途中で火災に会い、ほとんどが焼けてしまった (*Ibid.*: 132)。

Akka の生活について Schweinfurth はほとんど描いていない。それは彼が Akka の居住地で Akka を観察したのではないためである。わずかな記述によると、Akka は狩猟の産物を Monbuttoo に提供し、一方で Monbuttoo から保護を受けているといった、友好的な関係にあるという (*Ibid.*: 145)。

彼らの身体的特徴としては低身長 (4 フィート10 インチ (147cm) を越えない (*Ibid.*: 126)) であることに加えて、肌の色がまわりの黒人と比べて薄く、これが Du Chaillu の Obongo の記述と共通しているという。また、Dapper の Bakka-Bakka との名前の類似性¹²⁾ を指摘し、Akka の名前が大西洋岸まで知られていたと考えている (*Ibid.*: 135)。これらのことから赤道アフリカ全体に先住民であるコビトの人種が広がっていて、Akka もその一部であるとしている (*Ibid.*: 133)。

さらに Schweinfurth はブッシュマン¹³⁾ との類似性も強調している。Schweinfurth は南部アフリカの人たちを調査した Fritsch の本 (Fritsch, 1872) に基づいて、まわりの人たちに比べて低身長であることと、その本に載っているブッシュマンの絵と Akka の姿が似ていることなどから、低身長が特徴のアフリカのすべての人たちが1つの人種に属するのではないかという。そして、彼らが、分散して孤立状態にあって現在絶滅しつつある先住民の生き残りであるに違いないと述べている (Schweinfurth, 1874b: 139)。

もう一つ興味深いのは Akka と類人猿との類似性である。ただし、これは Obongo やブッシュマンとの類似性に比べると単なる印象に基づいたものである。例えば、「彼らの唇は重ならず、普通の黒人のようには厚くない。類人猿に対する類似を示唆するものは、開いた口の鋭い輪郭

である。ほとんどの黒人の突き出した唇を見ても下級な動物との関係を思い浮かべることは全くない (*Ibid.* 143)。」や「Lichtenstein はブッシュマンが人類ではなく類人猿のように顔の表情を絶え間なく変化させることを観察したが、Akka でもこれはとても顕著に表れる (*Ibid.*: 143-144)。」と Schweinfurth は述べている。

また Akka の知的能力が低く、感受性が弱いもしくはヨーロッパ人とは異なるということも指摘している。例えば、他のアフリカ人がすぐにアラビア語を使えるようになるのに対して、Nsewue は一年半たっても自分の考えをアラビア語で説明できず、Bongo の言語もどまりながら話す以上に進歩することはなく、わずかな人しか理解できなかったという (*Ibid.*: 144)。また、彼は Schweinfurth と出発する前に恐怖でおびえていたが、数日間ごちそうを好きなだけ食べさせたら彼は自分の問題を忘れてしまったといった話 (*Ibid.*: 149) や、旅の途中で戦争に巻き込まれて多くの人が死んだ光景に出くわしたとき、彼はそれに対して全く心を動かすことなく、恐怖心を示すこともなく、戦利品のまわりをスキップして遊んだという話 (*Ibid.*: 182) もある。

Schweinfurth は古代ギリシアのピグミーと彼が発見した Akka を同一の人たちであると想定している。ホメロスやアリストテレスのピグミーの話を紹介した後に次の文章がある。

キリスト教時代の3, 4世紀前にギリシア人はナイル川の水源地域に發育不全が特徴的な人たちが住んでいることを知っていた。文字通りの身長ではないにしろ¹⁴⁾、このような事実からすると、私たちはアリストテレスの意味において中部アフリカのコビトの人種に対してピグミーの名称を使用してもよいのかもしれない (*Ibid.*: 126)。

Schweinfurth は当然のように Akka とピグミーを結びつけている。これは、Akka がナイル川の水源の近くで発見されたということが大きな理由である。上記の文章のように、ホメロスやアリストテレスはピグミーの居住地をナイル川源流域と想定していた (北西2010c 参照)。

Schweinfurth による Akka の発見は Du Chaillu よりも真剣に受け止められた。それは Schweinfurth 自身が信頼のおける人物であるという評価を受けていたことと (Petermann, 1871: 139)、途中で亡くなったもの実際に Akka の一人を連れていたことが理由としてあげられる。さらに、Schweinfurth によるコビトの発見をかなり確実にしたのが、彼に続いたイタリアの探検家 Miani であった。Miani は Schweinfurth のコビトの発見を知り、自分も Schweinfurth と同じ経路をたどり、同じようにイヌと子牛を二人の Akka の少年と交換して連れて帰った。しかし不幸なことに、彼は旅の途中で疲れのために死んだ。ただし、この二人の Akka は無事カイロに到着し、そこで調査された後、最終的には Miani の遺言どおりイタリア地理学会に送られ、Miniscalchi 伯爵のもとで育てられた (Quatrefages, 1881-82: 704)。彼ら二人の数奇な運命は別の機会に書くこととして、とりあえず1870年代前半に話を絞る。

(2) Schweinfurth の報告と二人の Akka の若者をめぐる議論

Schweinfurth は、1873年12月5日にアレクサンドリアのエジプト研究所で Akka について講演している。その内容は上記の Schweinfurth (1874a, b) とほぼ一致するが、一点だけ異なる。それは、Akka の脊柱の曲がり方がCの形をしているという点である。12月12日の会議では脊柱の形が問題になり、Cの形をした脊柱では敏捷に動けず、Schweinfurth の話と矛盾するのではないかと言われた。しかし、一方でCの形をした脊柱はヒトとサルの中間の種によ

うに思えるため、人類学的にとっても興味深いともされた。一方でそのような体型をしているのは病理的な発育障害のためではないかという人もいた (Broca, 1874: 280)。

その後、Miani が連れてきた二人の Akka がカイロに到着し、彼らは Owen と Colucci-Pacha によって身体を調べられた。Owen は、二人の身長が 111cm と 100cm で、年齢は歯の萌出状態に基づいて 12~14歳と 9歳であると推定した (Owen, 1874: 255)。Colucci-Pacha は 1874年 2月20日の会議で、他の身体的特徴に加えて、脊柱は普通の人と同じように S の形に曲がっていたと報告した。その最後に、「要約すると、上記のいろいろな特徴を生み出す全般的な体の形態は、野蛮人や劣った人種としてすでに知られている人たちよりも、人類の特徴からずれているか」という質問に対して、彼は「そう考えてもよいだろう。しかし、いくつか不完全な部分があるものの、彼らは私たちが知っているような人類にきちんと属している。」と答えている (Broca, 1874: 283)。

これらのエジプトでの議論を受けて、フランスの人類学者の間でさまざまな見解が提出された。Panizza は彼らを体の小さな人たちと認めることに対して否定的だった。推定された年齢がもっと若い可能性があり、まだ現在成長を続けているとし、肌の色が薄いことについては白人の血が混ざっているのではないかと述べている。彼は、彼らをピグミーであるとするのは、科学ではなく空想を好きな評論家が不完全な情報から引き出した結論にすぎないと考えていた (Panizza, 1874: 463-465)。ピグミーの存在に否定的な人は、さらなる西と東の赤道アフリカでのピグミーの発見によって少なくなっていくが、この時点ではまだビュフォンの考え方を固持していた人もいた。

一方で、他の人たちは Schweinfurth の記述をある程度信用している。Broca は、Akka を体の小さな人たちであると認めているが、脊柱が C の形をしているという Schweinfurth の記述を疑問視している。脊柱が C の形をしているのはゴリラで、その形は二足歩行に適さないとし、Miani の Akka の脊柱の形と矛盾することから、Schweinfurth は腰の部分だけの脊柱の形を述べたのではないかと推測している (Broca, 1874: 286)。

Quatrefages は Akka を体の小さな人たちと認めつつも、Schweinfurth の記述に一部異論を唱えている。脊柱の形については Broca と同様の結論である。Schweinfurth は Akka の口の部分がサルに似ていると述べたが、Quatrefages は二人の Akka の写真から、これは間違いでありサルを思い浮かべるものではないという。そして、Akka が、進化論者が発見したがっているヒトとサルとのミッシングリンクではないということは、写真を見れば明らかであるとも述べている (Quatrefages, 1874: 504-505)。Quatrefages がこのようなことを強調しなければいけないということは、逆に Akka をヒトとサルの中間的な存在であると考えていた人がいたことを示しているのだろう。また Quatrefages は Schweinfurth とは違い、Akka とブッシュマンを結びつけず、Du Chaillu の Obongo のほうがブッシュマンと近いのではないかということも頭の形の類似性から推測している (Quatrefages, 1874: 505)¹⁵⁾。

実は Schweinfurth (1874b: 141) では、Akka の脊柱の形は S の文字のようであると記述されている。つまり、Schweinfurth はエジプトやフランスでの議論を受けて、表現を変えている。Schweinfurth 自身による明確な説明はないが、多分 Broca の説明のように彼は単に脊柱の一部の形を述べたにすぎず、C と表現したのは Akka の腹が膨らんでいて、それに伴って腰の部分の脊柱が大きく曲がっていることを強調したいためだったのだろう。Schweinfurth はこの点がこのような議論になるとは思っていなかったに違いない。Akka のことを自分たちと同じ人間と思っていたなら Schweinfurth の話は明らかに脊柱の一部を記述したものにすぎないと

判断されたはずである。これも、Akka と類人猿との類似性に興味をもたれていたことを示している。

ピグミーという単語に関してであるが、コビトの存在を認めない Panizza (1874) では当然使われていない。Broca (1874) では論文のタイトルにピグミーという単語が使われている。また、エジプトでの議論の紹介の中でピグミーという単語が頻繁に用いられている。Owen は二人の少年が黒人の類のピグミー人種であると述べている (Owen, 1874: 256)。Quatrefages (1874) は Akka と Obongo をピグミー人種であるとしている。

(3) その他の Akka

Schweinfurth と Miani の Akka の刺激を受けて、他にも Akka がヨーロッパに連れてこられた。Marno は現在の南スーダンで二人の Akka の女性に出会い、ヨーロッパに連れて帰った。前者の身長は101cm、後者は136cm で、彼は前者を13~15歳、後者を20~25歳と推定した。両者は Nyam-Nyam (Azande の他称) と Monbuttu の地域から奴隷として連れてこられていた。彼は主に身体的特徴について記述し、性格の記述も多少ある (Marno, 1875a; 1875b)。

前者は、かなり太った体型で、太鼓腹をしている。肌の色は薄めで、口や顎の形とともに Schweinfurth の記述どおりである。「首や胸郭、腹部の形は、ゴリラ、オランウータン、チンパンジーの体のこの部分を思い出させ、そのような類似性はこの人たちにふさわしい」と述べている。この少女の性格はまじめで、内向的で、強情であるという。彼女は感情をあまり示さず、恐怖を示すのは Marno が測定のために彼女に触るときだけ、喜びを示すのは彼女が砂糖をもらったときだけで、彼女はその砂糖を後で他人に見られずに全部食べるために、手の中に隠しておくという (Marno, 1875a: 159-160)。

後者は性格的には前者と反対で、最初はヨーロッパ人を全く見たことがなく、彼らによって殺されて食べられてしまうと考えると、恐怖におびえ、泣いていたが、慣れてくるとおしゃべりをして冗談を言い、笑っていて、活発で友好的な性格で、まわりの人たちの笑いを誘っていたという。身体的特徴は前者と変わらない (Marno, 1875b: 366)。

Marno は彼女たちをコビトと表現し、ピグミーという単語は使っていない (Marno, 1875a, b)。

他に Akka の成人女性が Gessi-Pacha によってイタリアに連れてこられた。彼女の名前は Saïda といい、Giglioli によって研究された。彼女の身長は134cm であった (Quatrefages, 1887: 255, 260)。

Chaille-Long は1875年に南スーダンの Makraka で Ticki-Ticki (Akka¹⁶⁾) の成人女性に出会った。彼女は奴隷として Monbuttu の王 Munza の宮殿から彼の娘といっしょにやってきた。彼女は25歳で、身長は4フィートにわずかに欠けるくらいで、とても太っていて、大きな目、平たい鼻を持ち、肌の色は鮮明な銅色である。彼女は足、腕、首につけた銅や鉄の装飾品を除けば葉っぱを腿の間につけているだけだった。彼が赤い布をプレゼントすると彼女はすぐに警戒を解き、たわいのないことを話し、しかめっ面をしたり小さな槍を持って踊ったりして彼を楽しませた。彼女によると、Gondo という人が Akka の王で、数多くの部族があり、Munza 王に奴隷と象牙を貢物として提供している。彼らは優秀なゾウのハンターで、槍でゾウを倒すという (Chaille-Long, 1876: 263-266)。彼女はカイロに到着後、オスマントルコ政府のエジプト総督に贈呈された (*Ibid.*: 301)。彼女の道化師のような振る舞いは Munza 王の宮殿でのコビトの役割と一致するのだろう。ゾウのハンターであるということは事実と一致している。王

の存在や貢物については慎重に評価する必要があるかもしれない。Chaille-Long はピグミーという単語を、Ticki-Ticki が「この奇妙なピグミーの実例」であるという表現で一度だけ用いている (*Ibid.*: 266)。

(4) Stanley

有名な探検家 Stanley は、1874年に始まった彼の2回目のアフリカ探検で、ビクトリア湖、アルバート湖を経てアフリカを横断し、コンゴ川の水路を確認し、1877年にコンゴ川河口に到着した。その時の探検の様子が *Through the Dark Continent* (1878) に描かれている。Stanley が最もピグミーと関わりを持つのは1887~89年の次の探検で、彼はピグミーと戦闘を繰り返しているが、これについては1880年代の話なので別稿で紹介する。本稿では2回目の探検に話を絞る。

彼は旅の途中でコビトについての話をいくつか聞いていた。例えば、Ruanda の端の Mkinnyaga の西のどこかにコビトの種族がいて、彼らは Mpundu と呼ばれ、他に Batwa もしくは Watwa というコビトもいる。彼らは2フィートしか身長がない (Stanley, 1878a: 470)。また、アラブ人から聞いた話では、彼は Lumani 川を渡り、Wakuna の人たちのところで6, 7人のコビトを見た。1ヤードの身長で彼らのおごひげは長く、頭は大きかった。彼らの国で交易をして、他の国では2週間以上かかって得ることのできる象牙を2日間で得た。3日目には王の村へ行き、さらに合計400の象牙を銅、ビーズ、タカラガイとの交換で手に入れた。その後、帰ろうとしたときにコビトたちとトラブルになり、戦闘となった。コビトたちは弓矢で攻撃してきた。戦闘は長く続き、両者の間に犠牲者が多数出たが、30人くらいが生き残って逃げ帰った、というものである (Stanley, 1878b: 100-105)。

Stanley は1876年12月4日に Ikundu という町付近で Watwa というコビトと実際に出会っている。Ikundu はコンゴ川に面した町で南緯2度53分である (Stanley 1878b: 169) ことから、現在の Kindu 付近であると思われる。彼の身長は4フィート6.5インチ (約138cm) で、頭が大きく、薄いチョコレート色の肌をしていた。弓矢を持っていて矢には毒が塗られていた。Stanley は一週間ほど彼を拘束した後、貝殻とビーズを与えて家に帰した。Stanley は彼が優れた地理に関する知識を持ち、洗練された発音をすると述べていて (*Ibid.*: 171-173, 176)、知的な側面を評価している。ただし、容姿については、醜い、顎の出た人と描写している (*Ibid.*: 173)。Stanley はこのコビトに対してピグミーという単語は使っていない。

4. 1870年代後半の包括的な研究

1860年代から70年代に、アフリカ各地からの報告や実際にピグミーがヨーロッパに連れてこられたことによって、アフリカに体の小さな人たちが存在することが確認された。一方で、実際に彼らが暮らしている場所まで行き、彼らの生活を直接観察するという点については、Du Chaillu と Lenz の不十分な描写しか存在しなかった。Akka の生活を直接観察した人はまだいなかった。

1870年代後半にはこれまでの調査をまとめる研究が発表されている。ドイツの Hartmann (1876; 1879) とフランスの Hamy (1879) である。この二人の研究を紹介しよう。

ドイツの人類学者 Hartmann は1876年に *Nigritier* という本を出版している。この本はアフリカの黒人全体を取り上げたもので、最後の9章に個々の民族がとりあげられている。その個々の民族の紹介の最後に出てくるのがピグミーで、その前がブッシュマンである (Hartmann,

1876: 490-501)。アフリカの民族の居住地、身体的特徴、物質文化、宗教などを章ごとに書いている *Die Völker Afrikas* (1879年出版) でも、第1章の居住地と第2章の身体的特徴ではピグミーとブッシュマンが章の最後に置かれている (Hartmann, 1879: 63-67; 94-97)。本の中での位置から、ピグミーとブッシュマンがアフリカの人たちの一つの極であると考えられていたことが分かる。

Hartmann (1876) では、まず、Battell、Dapper、Koelle などこれまでのピグミーについての報告を紹介している。その次に、Schweinfurth の本をもとに Akka について書いている。そこでは Schweinfurth が述べたブッシュマンとの身体的特徴の類似性を強調している。さらに、彼自身が話を聞いたエチオピア南部の Doqo の記述ののち、Du Chaillu の Obongo を説明している。そこでは Obongo とブッシュマン、Akka、Doqo の生活様式が類似しているという (移動生活、狩猟・漁撈を主とした生業など)。同じドイツ人の探検隊の Bastian の話の次に、Falkenstein の Babongo の写真をとりあげ、これもブッシュマンと Akka に似ていると述べている (*Ibid.*: 492-499)。彼は以下のように結論付けている。

私たちは次のことを確認しなければいけない。アフリカにおいてかつてかなり広い範囲に広がっていた民族が暮らしていて、その人たちの背は高くなく、体格もたくましくなく、確かに知性は持っているが、彼らは定住生活を嫌っていた。しかし、黒人、ベルベル人、シリア・アラブ人は、精神的にも肉体的にも優れていて、信頼のおける財産に支えられ、さらにしばしば厳しい軍の規律にも支えられ、狂信の力に心を奪われていた。もとい人たちは彼らによって散り散りに追い立てられ、従属関係に何度も陥った。この古い民族の生き残りとして、今ではしだいに衰微しているブッシュマン、Obongo、Babongo、Akka、Doqo、Waberi-kimo が観察され、まだアフリカのどこかに類似した散り散りになった民族のかけらが存在するかもしれない。この残った人たちが、彼らの早い時期の生活のまま、様々な状況で追い散らされ孤立させられて、個々の人たちの特徴とさまざまな言語が成立したことは明白だろう (*Ibid.*: 501)。

つまり、Hartmann は、ピグミーやブッシュマンが先住民であり、あとからやってきた人たちによって追い立てられ散り散りとなり孤立した結果、以前の生活に近いままの姿を残して現在まで何とか生き延びていると想定していたのである。そして、ピグミーやブッシュマンは、あとからやってきた本来の黒人よりも精神的、肉体的、社会・経済的に劣っている存在であるとされた。それが黒人によって追い散らされ、黒人よりも彼らの社会的地位が低い理由となっている。

Hartmann (1879) でも、ピグミーの間における関係、さらにピグミーとブッシュマンの間における関係、彼らと黒人の関係について何か所かで言及している。ときにはブッシュマンもピグミーの中に入れられている。

種族間のかなりの数の身体的相違や慣習における地域的な特殊性は別として、Doko、Akka、Abongo、ブッシュマンはすべて、彼らの外見においても、生活様式においても多くの一致点を確かに持っている。彼らは、アフリカのかなり多数の専門家には、もしかしたらもっとも風変わりな大陸すべての太古の原初の住人であるように、そして、黒人によって四方八方に離れ離れに追い散らされた種族のように思える。しかし、いろいろなことから推論すると、かなりの数のものが示すように、これらの小さな人たちは本当の黒人からそう遠い存在であるわけではない

(Hartmann, 1879: 65-66)。

ブッシュマン、Abongo、Akka、Doko など周知のいわゆるアフリカのピグミー種族はその外見において様々な相違があるものの、しかしなお共通の体型を示している。彼らは本当に背の低い体型で、かなり長い頭、幅の広い肩、膨らんだ腹、痩せた四肢、均整はとれているが短い手足、
(*Ibid.*: 94)

私はホッテントットとピグミーについて、彼らに独立して形成された普通とは違った特徴を完全に否認しようとは思わないが、しかし、彼らが彼らの身体的および心理的な本性において完全に黒人から遠く隔たっているとは信じていない。もちろん、この関係において、来るべき将来に、望まれる確信を私たちは得ることができるだろう (*Ibid.*: 97)。

ここでは前の本よりも少し慎重になり、体の小さな人たちの間の類似性を認めつつも、まわりの黒人との関連にも言及している。

生活様式に関しては、「遊動している Babongo とブッシュマンで最もみすばらしい住居が見られる (*Ibid.*: 102)」や、「Akka と Abongo は南アフリカの人たちの弓と類似した弓を利用して・・(*Ibid.*: 121)」、「Bongo、Doko、Abongo、ブッシュマンのような貧しい種族は、トカゲ、ヘビ、カエル、クモに加えて、飛べるようになったシロアリのオスと女王、脂肪の多い甲虫の幼虫、イモムシ、多種多様なその他の虫けらで満足している (*Ibid.*: 146)」、「知られているピグミーの種族の中で Doko と Abongo は統治機関がなく、本当の社会的な生活がない。それに対して Akka は彼らの指導者を持っているようである。Schweinfurth の報告では、Munsa によって捕えられている Akka の Adimoku が、Akka は 9 つのグループに分かれ、それぞれにリーダーが存在すると述べたという (*Ibid.*: 252)。」、「Doko、Abongo、ブッシュマンなどのような、とても粗野で不足した状態で生活しているアフリカ人は、
・・(*Ibid.*: 290)」といった記述がある。つまり、各地のピグミーの社会・文化的な類似性を強調し、Akka にリーダーが存在するというものを除けば、彼らの簡素な物質文化、単純な社会、食料確保のための技術不足により毎日の食にも困る貧しい生活といったことを強調している。その理由として、黒人との関連に触れつつも、彼らが過去の状態に近いもしくはそれを維持しているという意味での「原始的」な存在であるということが可能性の一つとしてあげられている。

フランスの人類学者 Hamy は 1879 年に「赤道アフリカの négrilles もしくはピグミーの民族学について集められた資料の統括についての試論」という論文を発表している。この論文は 1880~90 年代のフランスやイギリスでのピグミーの議論に大きな影響を与えており、いくつか間違えている部分があるのだが、それがしばらくは通説として通用することになる。

まず、négrille について説明しておこう。これはフランス語で黒人を意味する nègre に指小辞¹⁷⁾をつけたものであり、小さな黒人を意味する造語である。Hamy はこの単語を赤道アフリカの体の小さな人たちに適用することを提案している。この単語の利点は、黒人との類似性と東南アジアのネグリト négrito との類似性の両方を想起させられることだということ (Hamy, 1879: 100)¹⁸⁾。この négrille という名称は 20 世紀前半まで主としてフランス人研究者によって使用された。

Hamy は Battell、Dapper、ドイツの探検隊の紹介のあと、フランス人の探検家たちのピグミーとの接触について述べている。Hartmann と比べると同国人であるフランスの探検家の話が多い。ただし、先に述べたように、M'Boulous をコビトとする間違いを犯している (Hamy, 1879: 86)。

Hamy は頭蓋骨について詳しく分析しているが、その結果を簡潔に紹介する。大西洋岸から持ち帰られた頭蓋骨の分析をし、コビトは短頭もしくは垂短頭であるとされ (*Ibid.*: 93)、また、Schweinfurth は Akka の頭蓋をほぼ球状であると述べており (*Ibid.*: 97)、Miniscalchi 伯爵のもとで育っている 2 人の Akka の少年の頭蓋は中頭であり少なくとも長頭ではなく、Marno の 2 人の Akka の女性は短頭である (*Ibid.*: 98)。一方、ブッシュマンは長頭である。これまでの研究ではブッシュマンとの類似性が強調されていたが、頭の形の違いから、ブッシュマンとは異なる人たちではないかと彼は推測している (*Ibid.*: 93)。

Hamy の論文には Akka と古代エジプトの関係をうかがわせる記述がある。「東のピグミーの主要な部分はずっとも初期の古代の時代から Akkas と呼ばれていた」と Hamy は述べ (*Ibid.*: 97)、その注に「Mariette¹⁹⁾ が古代エジプト帝国のモニュメントに掘られたコビトの肖像画の横でこの名前を読み取った (*Ibid.*: 97)。」とされている²⁰⁾。1880年代には Quatrefages や Flower が Hamy の記述に基づいて、古代エジプトとピグミーの関係を紹介し、この話は広まっていった (Quatrefages, 1881-82; 1887; Flower 1888)。

ピグミーという用語についてであるが、Hartmann は二つの本で普通に用いており、Hartmann (1879) にはブッシュマンもピグミーに含めている記述がある。Hamy も論文の題名にピグミーという単語を使っているように、彼らをピグミーとすることに疑問を持ってはいない。

5. 考察

(1) ピグミーという名称について

中部アフリカの森で体の小さな人たちに会ったヨーロッパ人が、彼らをピグミーと呼ぶかどうかは、少なくとも当初は、大西洋岸から入った人と、ナイル川もしくはインド洋岸から入った人で異なるようである。Du Chaillu は Obongo との出会いを記述した最初の本ではピグミーという単語を使わず、ガボンあたりを探検したフランスやドイツの探検家もピグミーという単語をほとんど使っていない。使う場合は、古代ギリシアの伝説のコビトに言及する場合くらいである。一方、ピグミーが実在しないエチオピア南部ではピグミーという単語が使われ、Schweinfurth は明らかに Akka と古代ギリシアのピグミーを同一視している。ただし、Schweinfurth 以外の東の内陸部の探検家はあまりピグミーという単語を使っていない。

東の人たちにピグミーという単語が使われるのは (特に Schweinfurth や Krapf において)、ホメロスとアリストテレスのピグミーの居住地がナイル川源流域とされていたことによると思われる。地理的な近さがその理由だろう。

ほとんどの著者が使っている単語はコビト (dwarf, nain, Zwerg) である。現在、この単語を実在の人間に対して使うことはまずなく、完全な人間ではないというニュアンスを持ち、差別用語として受け取られかねない単語である。ただし、この時代では単なるコビトの方が、古代ギリシアのコビトであるピグミー、もしくは怪物や類人猿といったニュアンスを持ったピグミーよりも現実的だったのだろう。病理的に体の小さな人はどの社会にも存在している。ピグミーに対してコビトという単語がいつごろから使われなくなるかを明らかにするは、あとの時代の論文を読み進めていく必要がある。

一方で1870年代後半の包括的な論文 Hartmann (1876, 1879)、Hamy (1879) では普通にピグミーという単語が使われている。これは、中部アフリカの森に散在しているコビトたちが、先住民としてももとは同じ人たちであったという認識による。これにより、赤道アフリカの

西から東までの体の小さな人たちの包括的な名称としてピグミーという単語が使用されるようになっていく。1880年代には多くの論文でピグミーという単語が普通に使われることになる。さらに、それを越えた範囲（例えばブッシュマンやネグリト）でピグミーという単語を使うかどうか80年代以降議論されることになる。

(2) ピグミーの位置づけ

ピグミー（もしくは赤道アフリカの森のコピト）が実在するということがしだいに明らかになってくると、彼らはいったい何者であるのかということが問題になる。まずは、ピグミーがヒトであるのかという問題についてとりあげよう。ピグミーと類人猿との関係を最初に指摘したのは Schweinfurth である。彼は Akka に類人猿を思い起こす体の部分やしぐさがあるという。Marno も同様に Akka の類人猿との身体的な類似性を指摘している。とはいえ、ピグミーと出会った探検家の多くは、体は小さいものの彼らをヒトであると考えていた。実際に姿や振る舞いを見て、会話をした人からすれば、彼らをヒトとみなすことは当然である。

類人猿との関係は、ヨーロッパの研究者たちによる Schweinfurth が記述した脊柱の形の議論の背景に存在していた。結局、Schweinfurth は脊柱の一部分だけがCの形をしていると記述したのだと考えられるが、脊柱の形と直立二足歩行の関係が真剣に議論されること自身、Akka が本当にヒトなのか、それともヒトと類人猿をつなぐミッシングリンクなのかが問題となっていたことが分かる。現実のピグミーに会っていない人たちには昔からのピグミーのイメージがどうしても付きまってしまうのだろう。中世ヨーロッパではピグミーは獣であるものの、獣の中では人間に最も近い存在であるとされ、そののちには類人猿とされた（北西 2010c: 47, 50-51）。まさに、その位置づけがここで見られる。

ヨーロッパに連れてこられた二人の Akka は明らかにヒトであり、以後の発見からもヒトであるということが確かになっていく。Quatrefages は1874年の論文でこのことを強調している。とはいえ、Quatrefages はその後の論文や本でもピグミーがヒトであることを繰り返し述べていて（Quatrefages, 1881-2, 1887）、ピグミーをヒトとサルの中間的な存在とみなす考え方は容易になくならなかったようである。

ほとんどの探検家やヨーロッパの研究者の間で共通する見方がある。それは、ピグミーは赤道アフリカの先住民であり、彼らは後からやってきた本来の黒人によって追いやられて、散り散りになった人たちであるというものである。この仮説の根拠となるのは、赤道アフリカのピグミーの身体的特徴や生活様式の類似性と、その人たちが散在するという分布状態である。そして、もう一つ欠かせないのが、ピグミーがまわりの本来の黒人に比べて身体的・精神的・社会的・経済的・軍事的に劣った、弱い人たちであるという認識である。小さな身体、簡素な物質文化、遊動生活、複雑な社会組織を持たないといった一見してわかる彼らの特徴がそのような認識を生み出していると考えられる。極端な場合には滅びつつある人たちという見方もあり、Hamy はそれに従って、逆に滅びつつあるとされた人たちを実際には体が小さいわけではなかったのにピグミーのグループに加えてしまった。このような劣った弱い存在であるという認識は、前面に出てくるか背景としてかはいろいろあるが、この後も現在まで続いていると思われる。例えば、ピグミーに対する開発援助活動などでこれが見られた（北西、2010a、Hewlett, 2000参照）。また、ピグミーと農耕民との関係では、両者が支配・従属関係にあるのか、協力的で相互依存関係にあるのかということが議論されるが（北西、2010b）、その原点もここにあり。

彼らの体の大きさや生活様式がまわりの黒人と異なっている理由は二つに分かれる。原始的とするか、退化とするかである。Du Chaillu と Lenz は退化のために体が小さくなったとし、二人ともその理由は孤立した生活に伴う近親婚であると考えている。Schweinfurth は体の大きさの理由としては明言していないが、Akka を原始的な存在であると考えている。Hartmann は特に1876年の本で彼らが原始的であるとしている。原始的か退化かという問題は、現在でも形を変えて、ワイルドヤム・クエスチョンや（ピグミーではないが）カラハリ論争にも関わっている²¹⁾。現在の狩猟採集民は旧石器時代の生活を考える材料になるのかということとも関係している。ここでは現在の議論に立ち入らないが、これらはピグミーの発見当初から考えられていた問題だったことを指摘しておきたい。

ピグミーの評価において他の人たちと違いを見せているのが Stanley である。彼はピグミーを身体的には醜いとしているものの、知的に優れていると述べている²²⁾。この彼独特の評価は実際のピグミーとのコミュニケーションから生まれたものである。ただし、この評価が主流になることはなかった。また、このころは「高貴な野蛮人」としてピグミーが描かれることはない。単なる「野蛮人」である。

Quatrefages (1874) のように、東と西のピグミーで違いがあるのではないかと考えられたこともあったが、Hamy (1879) によって赤道アフリカのピグミーは同じ人たちであるということが定説となった。一方でブッシュマンとの関係は混乱している。Schweinfurth はブッシュマンとの類似性を強調し、Hartmann もそれに従い、時にはブッシュマンもピグミーの仲間に加えている。一方で Hamy は頭の形の違いからピグミーとブッシュマンを違うグループであるとした。また本来の黒人と関係があると想定されているが、その中身ははっきりしていない。これらの議論はその後にもさらに続く。また Hamy (1879) で指摘されたアジアのネグリトとの関係は1880年代に入って Quatrefages (1881-82; 1887) によって整理されることになる。

ここで紹介した議論には、用いられる単語や理論は異なるものの、現在の議論につながるものが多くみられる。探検の時代から植民地支配、独立、近年のグローバリゼーションの時代と、ピグミーを取り巻く環境は大きく変わったように見えるが、欧米人、さらにそれに加わった日本人と、ピグミーとの関係の背景はもしかするとそれほど変わっていないのかもしれない。この点についても今後考えてみたい。

注

- 1：本稿における訳語を説明する。英語の dwarf、フランス語の nain、ドイツ語の Zwerg はコビトとする。英語の Negro、フランス語の nègre、ドイツ語の Neger は黒人とする。英語・フランス語の race、ドイツ語の Rasse は、ある地域の人々の集団を指すときは種族とし、共通の身体的特徴を持つ人たちのまとまりを意味するときは人種とする。ドイツ語の Stamm は種族、Volk は民族、英語の tribe は部族とする。これらの単語は現在その使用においてさまざまな問題を持つ単語であるが、本稿では論文の性格上19世紀後半のヨーロッパにおいて用いられていた形で使用する。
- 2：ヨーロッパでは、19世紀後半にこのようなレビューワークがたくさん存在する。Petermann (1871)、Hartmann (1876; 1879)、Hamy (1879)、Quatrefages (1881-2; 1887)、Garnier (1884)、Flower (1888)、Schlichter (1892) などである。最近では Bahuchet (1993) がある。本稿はこれらの研究をもとに文献を収集しており、この研究の蓄積がなければ本稿を書くことは不可能だった。

- 3 : 1670年に出版されたのはドイツ語版 (Dapper, 1670) で、紹介した訳は1686年に出版されたフランス語に翻訳されたもの (Dapper, 1686) に基づいている。
- 4 : Lovango は Loango であると思われる。
- 5 : Schlichter (1892: 298-299) では、エチオピアのオモ川下流域に彼らを位置付けている。
- 6 : Hartmann (1876: 495) は Harris が Kraft の記述をまねて書いたとしている。
- 7 : ヘロドトス自身はこの人たちを体が平均より小さい人たちと述べているだけで、ピグミーとは呼んでいない (ヘロドトス, 1971: 180-182)。ただし、この人たちはホメロスやアリストテレスのピュグマイオイ (ホメロス, 1992: 87; アリストテレス, 1969: 24) と同一視されてきた (北西, 2010c 参照)。
- 8 : 北西 (2010c: 45) ではメラがピグミーの居住地をアラビア海沿岸から内陸部に入ったところに位置づけていたと述べたが、これは近年の研究によって明らかになったもので、それ以前は紅海沿岸からアフリカ大陸内陸部に入ったところであると考えられていた (Romer, 1998: 128)。
- 9 : 例えばピグミーについての包括的な論文である Quatrefages (1881-82) や Schlichter (1892) では実在する可能性が高いとされる。一方で Flower (1888) では実際に見たヨーロッパ人がいないためか全く記述がない。
- 10 : Speke は1862年にアルバート湖東岸で Kimenya という名前のコピトに出会っているが、彼の身長は1ヤードもなく、肖像画からも病的に体の小さな人であると思われる (Speke, 1863: 550)。彼は王のもとで道化師的な役割を演じていて、その点は後述の Monbuttoo の Munza 王のもとの Akka と一致する。
- 11 : Mohammed は Schweinfurth の従者である。
- 12 : 前述のように、Dapper は Bakke-Bakke と記載しているが、Schweinfurth は Bakka-Bakka としている。
- 13 : 現在、ブッシュマンという用語の使用は問題となっているが (池谷, 2002: 261; 丸山, 2010: 28)、本稿では19世紀後半の様子を忠実に伝えるために、当時使われていた用語をそのまま使用する。
- 14 : ピグミーの語源は肘尺 (肘から手首もしくは指の付け根までの長さで50cm 程度) を意味する Pygmé で、それほど小さくはないということを述べている。
- 15 : Du Chaillu は Obongo の頭が比較的大きいことを示しているだけで、頭の形については述べていない。Quatrefages がなぜこのような結論を出したのかはわからない。後で述べるように、Hamy (1879) は西のピグミーと Akka の頭の形が類似していて、ブッシュマンとは異なると結論づけている。これを受けて Quatrefages はその後の論文で考えを変えて、Hamy の説を受け入れている (Quatrefages, 1881-82: 697)。
- 16 : 彼の本では Akka は Ticki-Ticki という名称で表記されている。この名称は Schweinfurth の本にも Tikki-Tikki として出てくる (Schweinfurth, 1874b)。Niam-Niam (Nyam-Nyam) による Akka の名称である。
- 17 : 指小辞は、ある語についてそれよりもさらに小さい意を表す接尾語である。
- 18 : ネグリトはスペイン語の黒人 negro に指小辞がついてできた単語である。また、Hamy 自身はこの論文にはっきりと書いていないが、Hamy の考えをとり入れた Quatrefages (1881-82) では、ピグミーという単語はアフリカの négrille だけでなくアジアのネグリト (フィリピンのアエタやアンダマン島人など) も含めた体の小さな人たちを指す用語として用いてい

る。

- 19: Mariette は古代エジプトを専門とする著名なフランス人考古学者である。
- 20: ただし、Bahuchet (1993: 166) によると Mariette の著作の中に Akka という単語を見出したという記述はない。また、古代エジプトでピグミーかもしれないという単語は dng で、病的に体の小さな人は nmw であると現在では考えられている (Dasen, 1988: 259)。母音は記述されないので正確な発音は不明であるが、Akka とはほど遠い。古代エジプトとピグミーの関係については別稿で議論したい。
- 21: ワイルドヤム・クエスチョンについては安岡 (2010) を、カラハリ論争については池谷 (2002) を参照。ワイルドヤム・クエスチョンでは、ピグミーが先住民かどうかということもかかわっている。
- 22: Stanley は後にピグミーと戦い、かなり苦戦することになる。その経験から彼はピグミーの戦闘能力を評価していて、単に劣った、弱い存在としてのピグミーとは違うピグミー像を描くことになるのだが、それは別稿でとりあげる予定である。

参考文献

- アリストテレス、1969『アリストテレス全集8 動物誌 (下)・動物部分論』(島崎三郎 訳) 岩波書店。
- Bastian, A. 1874. *Die Deutsche Expedition an der Loango-Küste*. Hermann Coftnoble, Jena.
- Bahuchet, S. 1993. L'invention des pygmées. *Cahiers d'Études Africaines* 33 (1): 153-181.
- Boteler, T. 1835. *Narrative of a Voyage of Discovery to Africa and Arabia*. vol. 2. Richard Bentley, London.
- Broca, P. 1874. Les Akka, race pygmée de l'Afrique centrale. *Revue d'Anthropologie* 3 (1-3): 279-287.
- Buffon, G.-L. Leclerc, comte de, 1770-85. *Histoire Naturelle des Oiseaux*. Imprimerie Royale, Paris.
- Buffon, G.-L. Leclerc, comte de, 1774-79. *Histoire Naturelle, Générale et Particulière: Supplément*. Tome Quatrième. Buffon et l'Histoire Naturelle: l'Édition en Ligne (<http://www.buffon.cnrs.fr/>).
- Chaillé-Long, C. 1876. *Central Africa: Naked Truths of Naked People: An Account of Expedition to the Lake Victoria Nyanza and the Makraka Niam-Niam, West of the Bahr-el-Abiad (White Nile)*. Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, London.
- Dapper, D. M. 1670. *Umständliche und Eigentliche Beschreibung von Africa*. Bei Jakob von Meurs, Amsterdam.
- Dapper, D. M. 1686. *Descripton de l'Afrique*. (Traduite du Flamand), Wolfgangm Waesberg, Boom & van Someren, Amsterdam.
- Dasen, V. 1988. Dwarfism in Egypt and classical antiquity: iconography and medical history. *Medical History* 32: 253-276.
- Du Chaillu, P. 1861. *Explorations and Adventure in Equatorial Africa with Accounts of the Manners and Customs of the People, and of the Chase of the Gorilla, the Crocodile, Leopard, Elephant, Hippopotamus and Other Animals*. Harper & Brothers, New York.
- Du Chaillu, P. 1867. *A Journey to Ashango Land: and further penetration into Equatorial*

- Africa*. D. Appleton and Co., New York.
- Du Chaillu, P. 1870. Equatorial Africa, with an account of the race of Pigmies. *Journal of the American Geographical and Statistical Society*. 2: 99-112.
- Du Chaillu, P. 1872. *The Country of the Dwarfs*. Harper & Brothers, New York.
- Dybowski, J. 1894. Pygmées du Congo. *La Nature* 2: 305-307.
- Falkenstein. 1874. Taf. II. Babongo (photographirt in Chinxoxo). *Zeitschrift für Ethnologie* 6.
- Fleuriot de Langle. 1876. Croisières à la côte d'Afrique. *Tour du Monde* 31: 241-304.
- Flower, W. H. 1888. The Pygmy races of men. *Nature* 38: 44-46, 66-69.
- Fritsch, G. 1872. *Die Eingeborenen Süd-Afrika's*. Ferdinand Hirt, Breslau.
- Garnier, É. 1884. *Les Nains et les Géants*. Librairie Hachette, Paris.
- Hamy, E.-T. 1879. Essai de coordination des matériaux récemment recueillis sur l'ethnologie des négrières ou pygmées de l'Afrique équatoriale. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris* 2-3 série: 79-101.
- Harris, W. C. 1844. *The Highland of Æthiopia*. vol. 3. Longman, Brown, Green, and Longmans, London.
- Hartmann, R. 1876. *Die Nigritier: Eine Anthropologisch-Ethnologische Monographie*. Verlag von Wiegandt, Hempel & Parey, Berlin.
- Hartmann, R. 1879. *Die Völker Afrikas*. F. A. Brockhaus, Leipzig.
- ヘロドトス、1972『歴史(中)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- Hewlett, B. S. 2000. Central African government's and international NGO's perceptions of Baka Pygmy development. In *Hunter and Gatherers in the Modern World: Conflict, Resistance and Self-Determination* (Schweizer, P. P., M. Biesele & R. K. Hitchcock eds.), pp. 380-390. Berghahn Books, New York.
- ホメロス、1992『イリアス(上)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- 池谷和信、2002.『国家のなかでの狩猟採集民—カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』国立民族学博物館。
- 北西功一、2010a「アフリカ熱帯雨林とグローバリゼーション」『森棲みの生態誌』(木村大治・北西功一編)、京都大学学術出版会、pp. 59-76。
- 北西功一、2010b「アフリカ熱帯林の社会(2)—ピグミーと農耕民の関係—」『森棲みの社会誌』(木村大治・北西功一編)、京都大学学術出版会、pp. 21-46。
- 北西功一、2010c.「ピグミーという言葉の歴史：古代ギリシアから近世ヨーロッパまで」『山口大学教育学部研究論叢』60(1): 39-56。
- Koelle, S. W. 1854. *Polyglotta africana; or a Comparative Vocabulary of Nearly Three Hundred Words and Phrases in More Than One Hundred Distinct African Languages*. Church Missionary House, London.
- Krapf, J. L. 1860. *Travels, Researches, and Missionary Labors, during an Eighteen Year's Residence in Eastern Africa; Together with Journeys to Jagga, Usambara, Ukambani, Shoa, Abessinia, and Khartum; and a Coasting Voyage from Mombaz to Cape Delgado*. Ticknor and Fields, Boston.
- Lenz, O. 1878. *Skizzen aus Westafrika*. A. Gofmann & Co., Berlin.
- Léon des Avanchers, R. P. 1859. Esquisse géographique des pays Oromo ou Galla, des

- pays Soomali, et de la côte orientale d'Afrique, extrait d'une lettre du R. P. Léon des Avanchers, missionnaire apostolique, à M. Antoine d'Abbadie. *Bulletin de la Société de Géographie* 17: 153-170.
- Malte-Brun, V. A. 1867. Le pays d'Ashango: Fragment de la relation du seconde voyage de M. Chaillu dans L'Afrique équatoriale occidentale. *Annales des Voyages, de la Géographie, de l'Histoire et de l'Archéologie* 2: 257-290.
- Marche, A. 1879. *Trois Voyages dans l'Afrique Occidentale: Sénégal - Gambie - Casamance - Gabon - Ogooué*. Librairie Hachette, Paris.
- Marno, E. 1875a. Ein Akka-Mädchen. *Mittheilugen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien* 5: 157-160.
- Marno, E. 1875b. Ein Akka-Weib. *Mittheilugen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien* 5: 366-368.
- 丸山淳子、2010.『変化を生き抜くブッシュマン～開発政策と先住民運動のはざままで』世界思想社。
- Owen, R. 1874. Examen de deux nègres pygmées de la tribu Akkas, ramenés par Miani du fleuve Garbon. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, 2^e série, 9: 255-257.
- Panizza. 1874. Sur les Akkas. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, 2^e série, 9: 463-465.
- Petermann, A. 1871. *Mittheilungen aus Justus Perthes' Geographischer Anstalt über Wichtige Neue Erforschungen auf dem Gesamtgebiete der Geographie*, 17 Band. Justus Perthes, Gotha.
- Quatrefages, A. 1874. Observations sur les races naines africaines, à propos des Akkas. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris*, 2^e série, 9: 500-506.
- Quatrefages, A. 1881-82. Les Pygmées d'Homère, D'Aristote, de Pline, d'après les découvertes modernes. *Journal des Savants*. 1881: 94-107, 1882: 345-363, 457-478, 694-712.
- Quatrefages, A. 1887. *Les Pygmées*. Librairie J.-B. Baillièere et Fils, Paris.
- Ravenstein, C. G. (ed.) 1901. *The Strange Adventures of Andrew Battell of Leigh, in Angola and the Adjoining Regions. Reprinted from Purchas his Pilgrimes, with Notes and a Concise History of Kongo and Angola*. The Hakluyt Society, London.
- Romer, F. E. 1998. *Pomponius Mela's Description of the World*. The University of Michigan University Press, Jackson.
- Schlichter, H. 1892. The Pygmy tribes of Africa. *The Scottish Geographical Magazine* 8: 289-301, 345-357.
- Schweinfurth, G. 1874a. *The Heart of Africa: Three Years' Travels and Adventures in the Unexplored Regions of Central Africa from 1868 to 1871*. vol. 1. Sampson Low, London.
- Schweinfurth, G. 1874b. *The Heart of Africa: Three Years' Travels and Adventures in the Unexplored Regions of Central Africa from 1868 to 1871*. vol. 2. Sampson Low, London.
- Stanley, H. M. 1878a. *Through the Dark Continent, or, the Sources of the Nile around the Great Lakes of Equatorial Africa and down the Livingstone River to the Atlantic Ocean*. vol. 1. Harper & Brothers, Wasington.
- Stanley, H. M. 1878b. *Through the Dark Continent, or, the Sources of the Nile around the*

Great Lakes of Equatorial Africa and down the Livingstone River to the Atlantic Ocean.
vol. 2. Harper & Brothers, Washington.

Speke, J. H. 1863. *Journal of the Discovery of the Source of the Nile*. William Blackwood and Sons, Edinburgh and London.

Speke, J. H. 1864. *What led to the Discovery of the Source of the Nile*. William Blackwood and Sons, Edinburgh and London.

Touchard, F. 1861. Notice sur Gabon. *Revue Maritime et Coloniale* 3: 1-17.

安岡宏和、2010。「ワイルドヤム・クエスチョンから歴史生態学へ—中部アフリカ狩猟採集民の生態人類学の展開—」『森棲みの生態誌』（木村大治・北西功一編）、京都大学学術出版会、pp. 17-40。